

死にそうな
転生したら
孤鬼でした
5回目の人生、

Kou Sasaki
佐々木 鴻

III. でかるこ

ヴァレリー

*
ファルギエール侯爵家の令息。
ナディとは浅からぬ
縁があるようで……？

フランセット

*
たそがれ き だん
冒険者パーティ『黄昏騎団』に
所属する女騎士。
生真面目でまっすぐな性格。

シュルヴェステル

*
辺境の街・ストラスクライドの
冒険者ギルドマスター。
厳つい見た目に似合わず、
面倒見がいい。

ナディ

*
本作の主人公。転生を繰り返した末、
貧民街の孤児としての人生を与えられた。
四度の転生で手にした力を駆使し、
自由気ままに暮らしている。

レオノール

*
生まれたばかりの頃、母とともに
刺客に襲われていたところを
ナディに救われた少女。
今はナディの妹分。

幼少期の姿

幼少期の姿

Characters

序章 貧民街の幼姉妹

ナデイの家は、辺境の街・ストラスクライドを囲む高い壁の外——貧民街にある。つまり、とてもボロい。もちろん、これは資本、労力に比して利益が多いとか儲けが多いことを意味する「ボロい」ではない。純粋に今にもぶつ壊れそうなのだ。

そんな粗悪な環境で、多分まだ十二歳であるナデイは、必死に生きていた。

ちなみになぜ年齢が当て推量なのかというと、自分の正確な歳を知らないからだ。何しろ両親なんて見たことがないし。

気付いたときには独りだったし。

おまけに肺患いで呼吸もままならなく、今にも死にそうだったし。

ついでにひどい脱水症だったから、全身筋肉痛でちっとも動けなかったし。

そこからどうやって生き存えたかは後に語るとして、ナデイには五歳くらい離れた妹がいる。

妹といっても、血の繋がりはない。ナデイが五歳くらいだった頃、家の前……当時は半分ほど倒壊していた小屋の前で保護した赤子である。

「五歳児がそこまでするか？」とか、「考えなしに拾ったんだな」とか、そういうツツコミは多いだろう。

だがとにかく、当時のナデイに赤子を見捨てるという選択肢は微塵もなかった。

ナデイはその子にレオノールと名付け、妹として受け入れる覚悟を決めてともに暮らすことにしたのである。

とはいえ、まだ首の据わらない赤子を連れた五歳児が、貧民街でまともに生きていけるのかと問われれば、間違いなく否である。額く者など皆無だ。

だがそんな無理ゲーを引つ繰り返すだけの能力が、ナデイにはあった。

彼女には前世の記憶があり、前々世の記憶もあって、前々々世の記憶すらあり、さらには臍氣ながらその前の記憶まであったのだ。

今世に引き継いでいるのは記憶だけではない。転生を繰り返したことで跳ね上がった前世の能力や魔力までも、ナデイは手にしている。

つまりは、強くてニューゲームである。

まあ、無双する気はない。なぜなら記憶にある一番古い人生——一度目の人生で、地球から異世界転移したナデイは有無を言わず戦争に駆り出され、ひどい目に遭っていたからだ。

戦いの不毛さを痛感している彼女は平和主義者であり、争いは極力避けるようにしていた。

もともと戦闘が避けられなかったり、平穩が理不尽に壊されようとしている場合は容赦しない。

ナデイは平和主義者である以前に博愛主義者であり、さらには現実主義者だから。

自分自身や親しい人々を不幸にさせる要因を排除するためならば、物理的手段も辞さない覚悟を常に持っている。

ようするに平和を守る必要があれば、実力行使で解決するタイプなのだ。某戦隊やヒーローのようには！

一方的に仕かけられたのなら、反撃して当然だとナデイは思う。黙って殴られてやる義理はない。そんな彼女に、「平和主義者とか博愛主義者とか絶対に嘘でしょ、発想がテロリストだよな？」といったツツコミをする者はここにはいない。

だからナデイは、自分はそうだと本気で思っている。

【地面操作】

ナデイの朝は、魔法で地面を波打たせて掃除することから始まる。

掃除する対象はゴミではない。ねぐらとしている廃屋前にぶっ倒れている、身包みを剥がされたゴロツキもだ。

それらを荒れ放題の道の端に移動させたあと、今度は本来の意味で軽く掃除をし、ねぐらの前にある井戸から水を汲む。この世界にある多くの井戸は、桶を下ろして汲み上げるタイプで共用なのだが、ここのは手押しポンプ式だ。

作ったのはナデイ、掘ったのもナデイだから、専用である。

ねぐらの前にぶっ倒れていたゴロツキは、大抵はその手押しポンプの強奪か、ナデイとレオノールの誘拐目的で来ている。

目論見を果たす前にナデイの設置型魔法の餌食となり、意識を刈り取られているが。

貧民街の路傍で気を失うなんて隙を見せたのだから、身包みを剥がされるのは当然の結果だ。そ

のうち巡回の警邏が連行していくだろう。

道の端に寄せたゴロツキどもを見なかったことにして、ナディはいつもどおりに朝食の準備を始める。

ナディはちよつと立派な二口竈に水を入れた鍋を載せ、拾っておいだ廃材に火をつけた。

ちなみに、井戸も二口竈も鍋も魔法で作った代物だ。着火も魔法でこなしている。

「おや、ナディちゃん。おはよう」

朝の支度をしていると、斜向かいの廃屋から出てきた男が声をかけてきた。

十代後半ほどの見た目をした男で、丸顔で目が細く、張りつけたような笑顔が胡散臭い。まともな職業人には見えない。

若作りな容姿と張りつけたような胡散臭い笑顔は、ハーFRING……草原妖精の血を引く証だ。年齢は見た目どおりではないだろう。

「おはよう、オットさん」

ナディはそんな見た目や胡散臭い笑顔など気にしない。

いつものように挨拶を返しつつ、軒下に干してある魚の骨を取って鍋に入れた。

「なんだか今朝はいつもよりゴロツキが多かったねえ。しかも、見ねえツラだ。よそから来たヤツらか？」

「そうみたい。昨日私が換金してるの見ていたらしくて、跡をつけてきたのよね。レオも一緒だったから、きつと私たちを捕まえて、奴隷商に売り飛ばそうとでもしていたんじゃない？」

まだ十二歳だが、ナディはすでに冒険者を済ませており、依頼をこなして報酬を受け取ったり、採取してきた物を商店などに卸したりしてた。

彼女は、この地方では珍しい青みを帯びた黒髪——濡鳥色の髪と暗紫の瞳をしており、整った容貌をしている。十二歳にしてはちよつと発育もいいので、他より容姿がよく見えてしまうのだ。そして妹のレオノールは、白金髪と翠瞳の超絶美少女である。そんな姉妹二人が連れ立っていれば、当然人攫いをホイホイするだろう。

「かー、身の程知らずだねえ……ま、おかげでオレたちも儲かったが。あつ、これパンと腸詰め。レオちゃんに食わせてやんな」

笑顔は胡散臭いが気のいい近所さん——オットが、大きめな袋を持って竈の傍に寄ってくる。ちなみに、ここはすでにナディの設置型魔法結界の範囲内だ。

この結界は「悪意」に反応するよう設定されており、それがいない者には効果はない。

どう見てもゴロツキの仲間かその元締めにしか見えないオットであるが、そういった加害の意思を持たないことは明らかだった。

「いつもありがとう、オットさん……うわあ、なんか多くない？」

オットからの差し入れを見て、ナディは目を丸くした。

「いやいや、礼を言うのはこっちだ。いつも儲けさせてもらっているから、これくらいはしないと申し訳ないよ。それにこいつら、結構いい装備だったからねえ。みんなで分けたよ」

そう言うと、オットは貧民街に住んでいるくせに妙に綺麗な歯をキラリとさせてサムズアップ

した。

そして、井戸端会議をしていたご近所の皆様も、同じくいい笑顔でサムズアップする。

ナディやレオノールを狙ってくるゴロツキはすべて魔法の餌食となり、漏れなくご近所さんたちの懐を潤している。

自己防衛の副産物であるから、ナディとしてはゴロツキどもの処遇に対して何か言うつもりはない。

しいて言うなら、身包みを剥がしたあとは警邏に一任するのではなく、どっかに持っていってほしいとは思っている。見苦しいから。

とはいえ、見せしめのためにわざと道端に放置しているといった理由もあるのだろう。

そんな考えを巡らせながら、ナディは慣れた手つきで鍋を攪拌する。

「なあ、ナディちゃん。なんで干した魚の骨なんか茹でてるんだ？」

ナディの不可解な調理法に首を傾げ、オットが鍋を覗き込み、不思議そうに聞く。

質問されている間に、ナディは家の脇に植えていたハーブを取って鍋に加え、振り返りもせずに言う。

「魚の骨を干して煮ると、いい出汁——いい味になるの。本当は骨だけじゃなくて、身がある状態で干したほうがいいんだけど……このあたりでは手に入らないから」

川魚は泥臭いから、出汁を取るのには向かない。そう考えるナディである。

理屈を説明したところで、理解してもらえないだろう。この世界に「出汁」という概念はない

から。

案の定、オットは怪訝な顔をした。

「そうなのかい？ そいつは初耳だ。てか、美味いかそれは？」

調味料がほぼ手に入らない貧民街では、料理の味など一切期待できず、期待する者もない。

だが、ナディは違った。

あらゆる技術（前世技術）を使い、あらゆる知識（前世知識）を用い、あらゆる手段（物理的手段）を駆使して食生活の改善に努めた。そう、妹のために！

ナディはシスコンだった。四度目の人生で母親となった経験があるため、妹というより娘の面倒を見ているような気分だ。きつと五歳しか変わらないけど。

かくして、貧民街で必死に生きるナディ。

彼女が前世の記憶を思い出したのは、まだ五歳の頃のこと。

時はレオノールと出会う数ヶ月前にまで遡る。

それは、当時のナディがちよつと行き倒れて、孤独死しかけてるときだった——

一章 死にそうだった貧民少女は赤子を拾う

ナデイが覚えている最初の記憶は、戦場だった。そんな戦場で「彼女」は、生き抜くために必死に逃げていた。

戦場にいたといっても、將軍やそれに類する役職持ちではなく、末端の一兵卒だ。

扱いは決してよくはなく、はっきり言ってしまえば使い捨ての駒でしかない。

それでも「彼女」は生き抜いた。戦った、ではなく生き抜いた。

生きて、元の世界に帰るために。

そう。「彼女」はこの世界の住人ではなかった。別の次元にある世界——地球から迷い込んだ人物であつたのだ。

だが、帰還の願いは叶わなかった。そして異世界転移者という身の上ゆえに周囲と馴染めなかった「彼女」は、他者との関わりを避け続けた。

最期は誰にも看取られず、独りこの世を去つたのである。

ついで二度目の記憶では、身体能力に恵まれた。前世でのうつぶんを晴らすかのように、「彼女」は魔物を狩る者として頭角を現す。

実力はある一方で、ただ女であるという事実だけで他者に侮られ、苦しんでいた。しかし、それは最初のうちだけだった。

「彼女」が目覚ましい功績を挙げるにつれ、蔑む者は徐々にいなくなっていく。そういうヤツらを物理的な手段で黙らせていた、という事情もあつたが。

「彼女」は生涯独身で生涯現役だった。

晩年に差ししかつたある日、「彼女」は突然消息を絶つ。

同じ頃、村や街を襲う災害として恐れられ、討伐不可能だと言われていた災厄級魔竜『燃え爆ぜる皇帝竜』の襲撃が途絶えた。そのまま目撃情報さえ上がらなくなつたのである。

竜の襲来に怯えていた人々は、奇跡のような出来事に歓喜した。

彼らは姿を消した「彼女」を想い、つまりはあの人のおかげだろうと偲び、活躍を語り継いだという。

三度目の記憶は魔法使いであり、「彼女」は薬師として小さな街でちよつとした魔法薬を製造・販売する店を経営していた。

細々とした個人経営であつたため、店員を雇うほどの収入はなく、素材の収集は自力で行つていた。なぜか二振りの小太刀を使った物理攻撃が得意だったのだ。魔法使いを自称してはいたけれど、そのせいか、周囲から「冒険者が趣味で経営している魔法薬店」と認識されていた。本人は「あくまで自分は薬師であつて、冒険者は副業」と言い張つていたそうだが。

そんな日々を数十年送り、「彼女」は小さな店舗兼自宅のベッドで、息を引き取っているところを発見された。

人当たりがよく、みんなから好かれていた「彼女」だが、強烈に求愛してくる変態に好意を持たれたせいか、他者と壁を作る悪癖があった。最初から最後まで、「彼女」は独りのままであった。

さらに、四度目の記憶。「彼女」は辺境の地に一介の村人として生まれた。

だが、転生を繰り返した記憶を有していたため、武術と魔法の双方の才能を遺憾なく発揮できた。「彼女」はただの村人に甘んじず、そこから順調に成り上がっていく。

ついには若くして『千剣姫』という異名で称えられるほどの実力を備えた、最上位冒険者になっていた。……なお、気付いたらそうなっていただけであるため、本人はこの二つ名をものすごく嫌がっていた。

「彼女」はひょんなことから、ヒト種が暮らすいくつかの国々が連名で発令した強制依頼により、魔王の討伐軍に加わる羽目になった。

次々と仲間が倒れ行く中にあっても決して怯まず、なんとソロで『不滅の魔王』を打ち倒す偉業を成し遂げたのである。

とはいえ、不滅と称される魔王が、その程度で滅びるはずもない。

そんな魔王と十数回戦い、「彼女」はすべてで勝利する。

そうした強さと屈しない心、そして雄姿に惚れ込んだ魔王が熱烈な求婚してきたのは、完全に

予想外のことであったが。

最初は困惑していた「彼女」だが、いろいろあってヒト種の王族やそれに連なる者どもに辟易し、根負けして求婚を受け入れた。

その後、本人もビックリするくらい幸せになったような。

魔王妃となった「彼女」は、とある理由でヒト種から変質して魔人となり、約三百歳まで生きて天寿を全うした。

五度目の記憶——現在。

気付けば「彼女」は、孤児であった。

ある日、「彼女」は路地裏の片隅にある、薄汚れたボロ切れを集めた寝床にいた。

高熱と頭痛、強烈な倦怠感にさいなまれていて、追い打ちをかけるように意識が混濁していく。そのとき、謎の光景が脳裏をよぎった。

『頭痛薬を作るには、まず《——の葉》六グラムと《——の根》四グラムを三百ミリリットルの清浄水に投入して加熱する。ゆっくり攪拌しつつ濁りがなくなるまで煮つめて、溶液が澄んだら完成そこに《——の実》を一グラム加えて常温になるまでゆつくりと冷ます。色が変わったら、薬効に解熱作用も追加される。冷蔵してから果汁を加えると、えぐみがなくなつて飲みやすくなる——』
(え？ なんなのこれ？)

何か呟きながら薬を調合する手元が見えたものの、確認する間もなく「彼女」は意識を手放す。

『うん、いつもどおりに上出来ね。さすがは私』
ガラス窓に映る黒髪の女性と、それを嬉しそうに見つめる金髪碧眼の森妖精——エルフの男が見えた気がした。

再び目覚めたときには、夜の帳が下りていた。
冷たい風が吹きすさび、小さな身体から容赦なく体温を奪っていく。

(まずい。これ、死ぬ)

そう考えたものの、すでに身体が思うように動かず、呼吸さえも満足にできない状態だった。

(ああ、これは末期の肺患いか。埃だらけのところにずっといたせいね。熱もあるし、体力がなくなつて動けないんだな)

朦朧としつつも、「彼女」は冷静に自分を分析した。

(まず肺患いを治さないと……【大治癒】。あと体力も賦活させる。【体力賦活】)

四度の人生で培った経験が、死にかけの孤児に力を貸した。

最大級の治癒魔法と体力賦活魔法を発動させる。

自身を蝕む苦痛が消え去り、さらに身体から力が湧いてきた。

(喉がカラカラ。水分も塩も足りない……【清浄水生成】【塩水生成】。あと温まらないと凍えて死ぬ。急に温めても消耗するだけだから、ゆっくり中から温まらないと。【常設炎】)

水の球体が二つ現れ混ざり、一つとなる。その真下で、火が燃え上がった。風が吹き荒れている

にもかかわらず、炎は揺れないばかりか延焼さえしない。

火に炙られた水の球体はほどなくぬるま湯になり、「彼女」は躊躇なくそこに頭を突っ込んで、瞬く間に飲み干した。

「ああ、生き返った」

やっとともに声が出せるようになり、大きく息を吸ってから、ゆっくりと大きく吐く。

それを数度繰り返し、やがて盛大に咽せ込んで、気道に残っていた血と痰をまとめて吐き出した。

(ところで、私はどうしてここにいるんだ？ そもそもここはどこだ？ 道端？)

繰り返された人生の記憶が怒涛のように蘇る中、「彼女」は状況を整理した。

(まず、思い出したことを確認しよう。えーと、最後は——アデライドだ)

最後の記憶で、アデライドは夫——魔王ヴァレリアや子どもや孫、玄孫やその他大勢に看取られて死んだはずだ。

(ああ、大往生でいい人生だった……魔王の嫁になったせいで、『ヒト種の裏切り者』とか呼ばれたけど。確か、ヴァレリア——ヴァルが生きている限り互いに不可侵を貫くことにして、ヒト種連合を納得させたんだよね。ヴァルって不滅の存在だから、魔王軍は二度と侵攻しないって約束なんだよね。軍は解体して、農作業に従事させてたし。まあ、やれることはやったよね)

四度目の人生で巻き込まれたヒト種連合軍と魔王軍の争い。そもそもあれば、ヒト種の国々がちよっかいをかけたことで戦争に発展したのだ。

(魔族って言っても、魔法に長けている脳筋なだけの種族なんだけだね。いつの世もどの時代でも、

権力者のくっだらな理想や政策に振り回されて苦勞するのは、平民なんだよな……って、違う違う！ 今気にするべきは現状だよ、現状の確認！

彼女は周りを見回しながら、今の自分の記憶を探った。

まず思い出したのは、境遇のこと。五度目の「彼女」は、寄付金を横領する粗暴でアル中な修道女がいる孤児院から、みんな逃げ出したのだ。

多くはすぐに捕まり、孤児院へ連れ戻された。どういうわけか「彼女」は潜伏や隠身が得意であつたから逃げおせたのだ。

今にして思えば、過去の転生の経験を知らず知らずのうちに發揮していたのかもしれない。

（今の私の名は——えつ、ない。いつも『おい』とか『それ』って呼ばれてた。……腹立つな。あの修道女、いつか殴る）

【鏡牀】

いろいろと思い出し、物騒なことを考えつつ魔法を使う。目の前に鏡映の自分が現れた。

（……濡烏色の髪と暗紫の瞳。へえ。今の私はこんな感じか。顔立ちは違うけど、髪色が三度目にちよつと似ているからあの頃の名前で……いや、そのままだと芸がないな。ひとまず愛称のナディを名乗ればいいか。年齢は四、五歳くらい？ 栄養状態が悪くて発育もよくないみたいだから、もうちよつとってそうだけ……それにしても汚いな。野外で暮らしていたんだから、当然か）

【清浄】

まず身綺麗にしようと、「彼女」……ナディは魔法を發動させる。【清浄】の効果で、自分はもち

ろん、寢床に敷き詰めていたボロ切れ——ゴミ溜めから集めてきたため、薄汚れている——が一瞬で清潔になる。それどころか、路地裏の一角までもが輝かんばかりに綺麗になった。

明らかにやりすぎだが、本人に自覚はない。

（あとは寢床かな。雨は降らなさそうだから、とりあえずマットとシーツをなんとかしよう）

わずかに首を傾げながら思案を巡らせ、ナディは寢床に視線を向けた。

【補修】【気体操作】【暖気】

ボロ切れが修復されて大きな二枚の布になり、そのうちの一枚が袋状に再形成される。そこに温かい空気が流れ込んで膨らみ、そのまま固定された。

「寝てる間に誰かが来て、マットを盗られるのは嫌だから……【魔法素材生成】」

あたりに転がっている鉄屑や石コロに魔法をかけて小さな碑を五基ほど作り、自分の周りに配置して五芒星を形成する。

【悪意感知】【忘却】【魔力強奪】【物質吸収】【魔結晶生成】

そして作りたての碑に次々と魔法を付与していく。

やがてそれらが鈍い光を放って起動した。

「急造だからこの程度でいいかな。どうせ使い捨てだし。あと、うるさいのはごめんだから、【静寂】。ついでに【魔法効果延長】」

周囲に音が伝わらないようにして、その効果を延長させておく。

十分な準備が整ったところで……

「おやすみなさい」
とりあえず、ナディは眠ることにした。



翌朝。病み上がりで消耗していたのか、ナディは思いのほかぐっすりと眠っていた。
ようやく目覚めて、眩暈がするものなんとか身体を起こし——自身の周囲に散らばる魔結晶と、ゴロツキと思しき野郎どもが十数人ぶっ倒れているのに気付いて、ドン引きした。
昨夜眠る前に設置した魔法は、悪意に反応して発動し、対象者の記憶を曖昧させて魔力を根刮ぎ強奪して意識を刈り取るもの。おまけに、奪った魔力を収集して結晶化させるという代物だ。
「魔結晶が手に入ったからいいか。【魔法不活性化】【魔法解除】【収集】【収納】」
碑に付与した魔法を解除し、散らばっている魔結晶を収集魔法で集めてさっさと収納する。
こうした魔法は、三度目の人生で覚えたものだ。
ナディはなんでもないことだと言わんばかりに使っているが、世の魔術師が見たら大慌てするほどに高度なものだったりする。

現代は魔法ではなく、特定の呪文と魔術陣を要として発動させる、体系化された魔術が主流だ。呪文と魔術陣さえ覚えていれば、魔力制御ができる者であれば誰もが使える。

一方で魔法は、発動させる現象を理解し、理論立ててイメージを描かなければならない。学問と

しての側面が強いのだ。

その分、魔術よりも細かく効果が指定でき、強大な力を発揮できるのだが、ぶっちゃけてしまうと相当な努力が必要となる。

四度目の人生から数百年が経った今、そうした努力が必要な魔法は廃れてしまったのだが……ナディは知る由もない。

「あ、こいつらの身包み剥いでもいいよね。私に何かしようとしたんだろうし、これくらい慰謝料よ。服や装備は嵩張るから、お金だけでいいか……【探知】【収集】【収納】」

ナディはぶっ倒れているゴロツキに一切触れず、魔法を駆使して彼らの懐の財布から中身を抜き取った。

それだけでなく、衣服に縫い付けて隠している金銭まで根刮ぎ回収する。

「臨時収入、臨時収入つと。屋台でなんか買おう」

再び塩水と清浄水を合わせて希釈した水球を作り出し、一気に飲み干す。そうして空腹を紛らわせると、ナディは街と貧民街を隔てる壁の近くにある、屋台市へ向かった。

こうして、自らをナディと定義した少女の、五度目の人生が始まったのである。



壁の内と外、つまりは市街と貧民街とでは明確な貧富の差がある。貧民街の中であっても、そう

いった差は存在していた。

貧民街では、街へ続く門の付近から離れるほど、貧しい者が住まうのである。

理由は単純で、都市に到着してすぐの旅人は空腹に耐え切れず、門の付近に並ぶ露店で手軽なものを買うからだ。このあたりには自然と食品を扱う屋台が並び、金銭が動く。

空腹が満たされ、時間に余裕のある旅人が次に何をするのかといえば……目ぼしい物がないか、露店を散策し始める。

貧民街で暮らす者の中には、こうした屋台に交じり、商売をしている者がいた。

五歳のナデイもその一人。

露店市の隅っこに、彼女は莫座^{もざ}を敷いて座っていた。物乞い^{ものご}をしているわけではなく、ちゃんと売り物を並べて、である。

過去の人生の記憶を取り戻し、ナデイは常に魔法で身綺麗にするようになった。髪形に関しては相当手抜きだが。

今やちよつとオシャレなネックレスをつけているほどなので、実はしょっちゅう拐^{かどわ}かされそうになっている。

そのたびに例の自衛魔法セットが発動し、そういう輩をぶっ倒していた。

ナデイのネックレスは、魔結晶を五芒星を描いたネックレスヘッドに加工したものだ。そこに自衛魔法セットを付与しており、不屈きなゴロツキの意識を刈り取り、漏れなく財布の中身を回収する仕様となっている。

ちなみに、ネックレスヘッドに加工されている魔結晶一つ当たりの大きさは二ミリメートル程度。分かるヤツだけが価値に気付く。

もつとも魔法で効果を隠蔽しているため、気付いた者は今のところゼロだ。

ぶっ倒れたゴロツキは現金を抜かれたあと、その辺のヤツらに身包みを剥がされて放置され、警邏のお世話になっている。

近隣住民も儲かるし警邏の業績も上がるので、実に無駄のない経済循環だ。

そうして悪党をホイホイしているおかげで、魔結晶を文字どおり売るほど持っているナデイは、とりあえず露店に手を出したのだ。

露店を出している子どもは、別にナデイだけではない。

さすがに五歳児なのは彼女一人だが、ともかく。

子どもたちはその辺にある廃材や鉄屑をアクセサリーに加工したり、近くの森に行つて薬草を摘みだりして売っている。

中にはウサギなどを狩つて丁寧^{ていねい}にさばき、毛皮を売るといふ職人級の手際の良さを見せる子どもだっていた。

屋台市を巡る行商人の中には、そうした逸材^{いつざい}を見つけ、自らの弟子^{でし}にする者もいる。そういった者でさえ、五歳の少女が商売をしている様子にはさすがにギョッとしていた。

ナデイが並べている商品——魔結晶は、一見するとただの石コロにしか見えない。そのため、「露店の真似事をしているんだな」としか思われていないのが現状だ。

(魔力を固めただけのものだし、珍しくもないからな。まあ、こんなもんでしょ) やっぱり分かっていないナデイである。

一般的に回収している魔結晶は鉱物で、純度はよくておおむね十%前後。それを超えているものは、非常に希少だ。

なお、ナデイが莫座の上に無造作に転がしているそれらは、脅威の純度百%。不純物が一切混じっていない。

まあ、魔力を吸収して生成したのだから当たり前だが。

そんな常識外れの代物がこんな露店で正しく評価されるはずもなく、当然ながら売上は皆無であつた。

そもそも価値を理解していないナデイはそれで困るわけでもなければ、落胆するわけでもない。夕方になって店じまいをし、いかにも落ち込んでいるかのように俯いて帰路につくナデイ。

それを追うゴロツキども。

ナデイが路地裏に入ったのを確認して、彼らは一斉に襲いかかり……まとめて自衛魔法の餌食となった。

そう、ナデイが売れもしない露店を出している理由。それは自身の年齢と容姿を逆手に取り、ゴロツキから金を巻き上げるための撒き餌だった。思いのほか遅い稼ぎ方をする少女である。

「貯金がまた増えた。この歳じゃ、使いどころがないけど」

独り言ちつつ、例のごとくゴロツキの所持金を根刮ぎ回収する。

小銭がどんどん増えていくが、本人の言うとおりに使いどころがない。せいぜい露店でちよつとした食べ物を買う程度だ。

現在のナデイの【収納】には、なかなか額の貯金があつた。

散乱した魔結晶と財布の中身を慣れた様子で回収し、彼女は莫座を抱えてねぐらである廃屋へ帰っていく。

そしてその様子を、ナデイのあとを追うゴロツキを尾行していた、貧民街の住人たちが見守っていた。彼女が路地を曲がって見えなくなると、物陰から飛び出し、気絶したゴロツキどもの身包みをやっぱり剥がし始める。

今現在、ナデイはこのあたりの住人たちの間で、ちよつとした有名人になっていた。

可愛い見た目をして、襲いかかるゴロツキどもの意識をまとめて刈り取る『死の天使』、もしくは『引剥』……そんな二つ名で呼ばれ始めていることを、本人はまだ知らない。知りたくもないだろうが。



死にかけた拍子にかつての記憶を取り戻し、ナデイがチートに目覚めてから三ヶ月が過ぎた。

ホイホイしまくったせいで不名誉で中二病な異名がついていることなんて知りもせず、彼女は変わらない日々を過ごしている。

その日、夕闇^{ゆふぐみ}があたりを包む中、ナディは懐が温まってホクホクしながらねぐらに帰り……呆然^{ぼうぜん}とした。

ねぐらの前に、質のいい桜色^{さくらいろ}のコットをまとった、全身が血と泥に塗^ぬれている若い女性が座り込んでいたからだ。

明らかに面倒事である。それでもナディは、彼女を見捨てはしなかった。

なぜなら、女性はまだ生後数日であろう赤子を大切に抱えているのだから。

「そう……子どもを守ったんだね。偉^{えら}いわ」

今にも息絶^{いきたま}えようとしている女性の傍^{かたわ}らに近寄り、ナディは血で濡れた白金髪を撫でる。

そうされてやつとナディの存在に気付いたその人が、双眸^{そうぼう}を薄^{うす}く開いた。

もはや何も映していないであろう翠瞳^{すいどう}をこちらに向けて、女性は喘^{あえ}ぐように声にならない呟^{ささや}きを漏らす。色を失った唇をわずかに引き締めて、そのまま息絶えた。

「頑張ったんだね。本当に偉いわ」

独白し、ナディは女性の腕の中にいた赤子を優しく抱きかえた。なんといつても前世は子持ちだったので、抱き方は堂^{どう}に入っている。

それはさておき。

見るからにワケアリな母子。おそらく女性は、何かから逃げてきたのだろう。

彼女を血塗れにした原因は、確実に近くにいるはずだ。

そしてそれは、すぐに姿を現した。

ナディは横目で背後を確認する。

夕闇から現れた、性別不詳な覆面姿の五人組。身のこなしや気配から、全員相当な実力者であることが窺^{うかが}えた。

死んだ女性は血と泥に汚れていたが、身にまとっていた衣服の質がよい。状況を鑑みるに、彼らは彼女と赤子を抹殺^{まっさつ}するために遣^おわされた刺客^{しやく}だろう。

この世界で命は軽い。貧民街では顕著^{けんちやく}で、一見華やかである貴族社会では、それ以上に価値が軽い場合もある。

彼女——この母子は貴族社会でのいざこざに巻き込まれたのは想像^{さうぞう}に難くない。

「私はね、基本的に平和主義者^{パシフィスト}で博愛主義者^{フィランソロピスト}なのよ」

語りかけるように、諭^{さと}すようにそう告げるナディを前に、五人は互いに顔を見合わせてわずかに肩を震^{ふる}わせた。

きつと、「この幼女は何を言っているのだろう？」とも思っただろう。

今の自分の見た目はナディだって理解しているが、それでも続ける。

「ねえ知ってる？ 平和主義者^{パシフィスト}や博愛主義者^{フィランソロピスト}だって、平穩が壊^{こわ}されそうになったときは全力で抗^{あらが}うのよ」

落ち着いた口調のまま続け、ナディは赤子を抱いたまま首だけ捻^{ひね}って振り返る。

視線はどこまでも冷たく、深淵から覗き見ているようだ。口元に薄く笑みを浮かべた冷淡な表情は、とても五歳児ができるものではない。

果たして、覆面姿の五人は一斉にナディへと襲いかかり――

【悪意禁令】 【虚偽封印】 【重呪法】 【忘却】

ナディの魔法によって高速で構築された陣に絡め捕られ、瞬く間に意識を刈り取られた。

彼女が重ねて構築した魔法。

それは悪意を抱けないようにしたうえで虚言を吐けなくする、強力な呪いだ。おまけに、今の出来事を記憶から抹消した。

目覚めた彼らはこれから、聞かれたことに対してすべて告白してしまうだろう。それは隠密として、そして暗殺者としての終わりを意味する。

「身の程知らずが」

倒れた者たちへ最大級の侮蔑を向け、ナディは再び魔法を唱えた。

【魔力強奪】 【魔結晶生成】 【収集】 【収納】

例のごとく、魔力を根刮ぎ奪い取って結晶化させて回収するのも忘れない。ナディにとってこの作業はルーチン化されていて、ほぼ無意識でやっている。

ナディの家の前でぶっ倒れた、いかにも怪しい彼らは……ホイホイの御相伴を狙っているであろう、貧民街の皆様が適切に処理してくれるはず。

その後は警邏がいつもどおりに回収し、衛兵の詰め所行きだろう。

そんな些事より、ナディにはすべきことがあった。

【補修】 【状態保存】

血に濡れて息絶えた女性に、修復と腐敗防止の魔法をかける。それが、最期まで我が子を守ろうとした母親への、餞であると考えたから。

治癒魔法は死者には適用されない。【補修】をかけたのは、せめて傷を消してあげようと思つてのことだ。

かくして赤子を保護したナディだが、ここでやっと自分自身の年齢と境遇を思い出した。

「……どうしよう」

無意識に天を仰ぎ見る。いわゆる後悔先に立たずならぬ、後悔役立たずというヤツだ。

まだ五歳であり、頼る者が誰もいない子どもが赤子を引き取っても、何もできない。よって赤子に対する最適解は、見て見ぬフリをすること。

だが、ナディが取った選択は違った。

【解析】

まず赤子の状態を解析する。

極度の飢餓状態にあり、体温が下がっていた。呼吸はしているものの弱々しく、このままでは夜が明ける前に死んでしまうだろう。

このときナディの脳裏に、四度目の人生で早世した娘との記憶がフラッシュバックした。

生まれたときから病弱であり、ふとしたきっかけで体調を崩していた娘。

健やかに育つこともなく、わずか十六歳で早世した――初めての子ども。

状況は違えども、一つ間違えれば、四度目の自分も赤子のうちに娘を亡くしていたかもしれない。

(この子は、私の娘だ)

【コントロール・エナ
【気体操作】 【暖気】】

まず必要なのは体温。そう判断したナディは、ほぼ無意識に魔法を展開した。自身と赤子の周囲に空気の膜を形成して暖気で満たす。

ひとまず、これで一時しのぎにはなるだろう。

それから思考を整理して、一つの結論に至った。

「ん？ おや、ナディちゃん。どうしたんだ……んお!? なんだこの見るからに怪しいヤツら!？」

すなわち、母乳が出ないなら、出る人にお願ひすればいいじゃない、と。

「おーい……ナディちゃん、何があつた？ ……つて、聞いてねえな。こりゃ」

この近辺でそんな人がいる場所――

「いや知らないわよそんなこと！ どうしろつてのよ！」

「うわ！ びっくりした……いきなりどうしたんだよ」

思案に耽つていたナディは、セルフツツコミをしてようやく我に返った。

声がするほうを見上げれば、廃屋の斜向かいの住人――オットがいる。

どうやら彼はこれから出かけるようで、身綺麗な格好をしており、妙に浮かれているようだ。

しかし、それにコメントする余裕が、今のナディにはない。

(乳幼児用のミルクってどこに売っているんだろう。哺乳瓶とかいろいろ用意しなきゃならないじゃない。一本じゃ足りないだろうし、最低でも三本は欲しいよね。いや、だからそれ以前にどこ

に売っているのよ！)

赤子を養う決心を固めたものの、基本的な情報がないナディに、そうとは知らないオットが機嫌よく言う。

「それよりさ、聞いてくれよナディちゃん。オレのコレが子どもを生んだんだよ！ これから会いに行くんだけど、土産は何がいいかな？ やっぱり精が付く食いもんとかかなあ？」

デレッデレのだらしない笑みを浮かべて、オットは小指を立てた。

そして「土産はやっぱり肉か？ 内臓系がいいとか聞いたけどな。そうだ、干して日持ちさせた果物とかもいいとか婆ちゃんに昔聞いた気がする」などとウッキウキで続けている。

話を聞き流し、ナディは取るものもとらず雑貨屋に向けて魔法で飛び立とうとした――が、あることに気付いてグリンと首を捻り、オットを見つめる。

つい視線が先ほどの深淵から覗き込むようなものになったが、今はどうでもいい。

「今、誰が、何を生んだつて？」

「おおう……どんな首してんだよナディちゃん。てか、なんて目で見るんだよ。オレ、なんかしちまったか？」

どのような関節可動域をしているのか、角度にして百二十度くらい首を捻って振り返った様は軽くホラーであった。

ナディの恐ろしいな視線もあいまって、目の当たりにしたオットは盛大に引いている。

「今それはいいから！ 子どもを生んだの!? 誰が!？」

扱いを否定していたのだが……ナディは二人の事情についてはツッコまないことにした。

アガータに邪険にされたオットが、なぜかすぐく嬉しそだったのなんて、どうでもいいだろう。なお、「なぜレオノールと名付けたのか」と問われたナディは、「私が最初に生んだ子の名前がレオノールだったんだ」と、ツルツと口を滑らせた。

レオノールというのは、四度目の人生でできた、早世した最初の娘の名前である。

二人に訝しげな視線を向けられ、ナディは慌てて「子どもを生んだときに付けようと思っていた名前の間違い」と言っでごまかしたのだが、やっぱり五歳児にしてはありえない返答に、オットたちはさらに訝しんでいた。

レオノールと名付けられた赤子の生みの親であろう女性とは、こびりついた泥や血痕を落として丁寧に化粧を施した。

遺品として髪を一房切り、桜色のコットから純白の装束に着替えさせた後、丁重に埋葬している場所とは街の一角——貴族街にある墓地だ。ここには訪れる者がいない墓が相当数あるため、こっそり埋葬しても意外とバレないのだ。

貴族の中には没落する家がままあり、ゆえに墓守は訪れる者を拒まない。

ナディとて、亡骸を無闇にここへ埋葬しに来たわけではない。きつと貴族令嬢だったであろう女性に最大の敬意を払うべく、この場所を選んだだけだ。

埋葬は墓守の目を盗み、【認識阻害】の魔法を展開して行つた。五歳児が墓穴を掘っていたら、それだけで目立ってしまうから。

●●●●●
特別製の墓碑に【母レオノールここに眠る】と銘を刻む。女性は素性を示すものを一切所持しておらず、名前すら分らない。

ゆえにナディは、自身が名付けた赤子の名をもじってそう記した。

(ごめんなさいね。いつか名前が分かったときには、銘を直すから。それまでは我慢してて)

このときのナディの考えが、数年後ちよつとした騒動を起こすのだが……今はどうでもいい話だ。そうして女性を埋葬し、ナディはすっかり元気になったレオノールを預けている、アガータたちのもとへ戻ってきた。

そして、「レオノールにお乳を分けてほしい」と改めて頼んだのだが——

「ま、あたしや構わないさ。一人も二人も同じだしね」

アガータは豪快に笑い、ナディの願いを快諾した。

そんなアガータだが、顔色が悪くやつれており、あきらかに産後の肥立ちが悪い。

それに……

【解析】

ナディがこっそり調べたところによると、アガータは肺病に侵されていた。

貧民街にある色街は不衛生で、常に埃が舞っている。食事も満足にとれない環境に置かれていたら、出産という大仕事を終えた彼女が体調を崩すのも仕方ないことだろう。

【持続治療】【遅緩再生】【体力維持】

恩人であるアガータに少しでもお礼がしたくて、こっそり持続治療魔法と遅緩再生魔法、ついで

に体力維持魔法をかける。これで少しずつ病が癒やされ、体調も徐々によくなるだろう。一気によくなったら訝しがられるだろうし。

あとは再び体調を崩さないよう、体力を維持させればいい。

（レバーとか食べてもらえばいいかな。鉄分の補充は大切だし。あとは果物を……つてか、レバーはともかく、果物って貧民街じゃそう売ってないじゃない。ドライフルーツでもいいのに！　くう、世間知らずなこの身が恨めしいわ！）

などと、先々のことまで考え、妙なところで我が身を省みる五歳児である。

悩むナディに、自身の肺病が癒やされつつあることなど知りもしないアガータが真顔で言う。

「ナディ、頼みは聞いてあげてもいい。でも困ったことに、あたしにや蓄えがそんなにないんだよ。だからレオノールに乳を分けるってんなら、アンタに相応の報酬を支払ってもらうよ」

貧民街で生き残るためには、稼がなければならぬ。よって、報酬を要求するのは当たり前だ。

相手が、たとえまだ幼児だったとしても。

情に訴えても、そんなものは通用しないし価値もない。

「お、おいアガータ。いくらなんでもそれは——」

やりとりを傍で見ていたオットが、思わず口を挟むが……

「黙れ宿六。アンタにや聞いてない。相手がガキでも知ったことか。覚悟もなしにガキをこさえたり、拾ったりするヤツがあたしや嫌いなんだよ。労働に対価が必要なのは当然だろうさ」

即座に却下された。思わずシュンとするオットである。

厳しいように見えるかもしれないが、アガータの意見は当然のことである。「なんとなく助けた」では、貧民街では本当に生きていけない。

「で、ナディはあたしに何をしてくれるんだい？」

冷たい目で告げるアガータ。

威圧しているつもりはなく、当たり前のことを淡々と告げたにすぎない。

だが、少なくとも子どもに対して取るべき態度ではないことは確かだ。

その証拠に、傍で聞いているオットのほうがオロオロしている。

「私が出せる対価……」

「おおさ。あたしが納得できるヤツを寄こしてみな」

アガータも鬼ではない。ここでナディがちよつとでも頑張る意思を見れば、適当なところで折り合いを付けようと思っていた。

果たして、ナディが提示したものは——

「銀貨三十枚。とりあえず一時金で」

銀貨一枚は、地球で言うところの十万円程度の価値である。

ここは貧民街。当然ながら簡単にお目にかかれる金額ではない。

「……………は？」

予想外の提案に呆然とするアガータを見て、ナディは「不足している」と判断した。はるか斜め上の返事をしている自覚はない。

「じゃあ、追加で銀貨二十枚……これ以上はちょっと厳しいなあ」
さらにそんなことを追加で提案する。

しかしアガータからの返答がないので、「やはり足りないか」と解釈し、両目を閉じて眉間に皺を寄せ、腕組みをしながら悩んだ。

やがてナディは、妙案を思いついたとばかりに満面の笑みを浮かべる。仕草が完全に五歳児ではない。

「細かい硬貨もあったほうがいいよね。じゃあ、銅貨と小銀貨も入れとくね。小鉄貨や鉄貨、小銅貨はなくてもいい？ こっちは私が使いたいから」

利便性を考慮して、【収納】から出した袋に小銭まで入ようとするナディ。ちょっと誇らしげだ。ちなみに貧民街での年収は、銀貨十枚あれば裕福なほうである。

「あれ？ えーと、ちょっと待っておくれ……」

「どうしたの？ アガータさん」

「いや『どうしたの？』って……どうかするねえ。どうかしちゃうよねえ。なんかこう……初っ端から間違ってるよね？」

そう。アガータとしては、貧民街で生きる厳しさと一時の優しさの代償を知ってもらい、そのうえで悲壮な覚悟を示してくればよかったのだ。何もいきなり現金を出せという話ではない。

「あれ？ あたしが間違ってる？ 何かおかしいこと言っちゃったわけ？」と言いながら混乱しているアガータを安心させようと、ナディはすこぶるいい笑みを浮かべた。

「大丈夫！ 私、ゴロツキとか悪徳奴隷商とか変態貴族とかを返り討ちにして、迷惑料を頂戴してるから！」

「いやいや分かんない分かんない、全然分かんない。何、ええ!? どういうこと!？」

アガータはオットを見上げ、説明を求める。

先ほどのやりとりで気落ちしていたオットは、たったただで上機嫌になった。

「あー。ナディちゃん、なんか自分を狙うヤツらを自動的に気絶させるアーティファクトを持つてるらしいんだよ」

この世界では、魔術具と呼ばれるアイテム——魔術陣を刻んで、着脱式の魔結晶をはめ込んで魔術的效果を発動させる道具が流通している。こちらはわりと一般的だ。

ナディが持つネックレスは、一般的に使われているそれらとは異なる、特殊なアイテム——アーティファクトだ。

魔術陣の刻印があるせいでサイズが限定される魔術具と異なり、アーティファクトは魔法を付与したアイテムだ。そのため、どんなに小さくても効果が期待できる。

付与できる効果の数も、格段に多い。

魔法が失われた現在では、こうしたアーティファクトは主に遺跡から出土する。

基本的には国宝として高値で取引されるのだが、時として効果が不明なガラクタが見つかり、不要と判断されることもある。意外なところに捨てられているのだ。

ナディのネックレスは少々事情が異なり、そうして拾ったものではなく、自身で作ったものだ。

アガータが、盛大にため息をつく。

「しばらく前から噂になってた『死の天使』とか『引剥』とか呼ばれている幼女って、ナデイのことだったのかい……酔っ払いの戯言だと思っていたのに……」

オットの説明を聞いたアガータが、額を押さえた。

彼女の反応が不本意だったのか、ナデイは弁明しようとした。

しかしその前に、何か聞きたくない単語が含まれていたことに気付く。

「え！ 何その恥ずかしい二つ名!? しかも二つもあるとかなんなの!? 通り名が二つあるから二つ名かー、ウケるー……って、やかましいわ！ 誰よそんな根も葉もない噂を吹聴してるのは！」

「感情の起伏が激しいな」

若干パニックってノリツッコミをするナデイを、オットが冷静に評価する。

「二つ名はともかく、噂のほうは根も葉もあるだろ。何日か前には、ナデイちゃんを攫おうとした男——アクセサリーをゴテゴテにつけた、ハゲデブなお貴族を見たぞ。逃げるフリしてうまく路地裏に誘導して、お付きの執事とか護衛の騎士どもとかもろとも意識を刈り取って、引剥してたろ」

そうツッコんだオットが、胡散臭い笑みを浮かべてさらに続ける。

「いやあ、あれはいい稼ぎになった。性根が腐っててもさすがお貴族。いろいろいい値で売れたよ。おかげで借金を全部返せた」

「あれは正当な迷惑料よ。それに私、お金は根刮ぎもらうけど、それ以外には手を出さないわ」
貧民街で意識を失えば、当たり前のように全部持つていかれる。

相手がお貴族ならなおさらで、アクセサリーはもちろんのことパンツさえ残らないのだ。

さすがに命までは取らない。懲りずにまた来て、ホイホイできるかもしれないから。

「それはそれとして、お貴族に遭遇したら、身包み剥いだあとで、『倒れていたから保護したんだよー』って素知らぬ顔で助けたいいのよ。さらに儲けを得られるかもしれないわ」

「おお、なるほど！ その手があったか！」

楽しそうに悪巧みをしているナデイとオットをジト目で見るが、とやかく言うつもりはないアガータだった。現場にいたら、彼女も同じことをしただろうし。

明らかに五歳児にはない発想を嬉々として披露しているナデイを訝しく思うアガータだったが、ここは貧民街。たった一人で暮らしているナデイの思考が大人びるというか、小賢しくなるのはさもありなんと考えていた。

ぶっちゃけて言えば、思考を放棄したのである。

アガータはそんなナデイと楽しげに計画を練っているオットに、ジトツとした視線を向けた。残念ながら、彼は悪巧みに夢中で気付かなかったが。

「まあ、ナデイに余裕があるってのは分かった。でも、いつまでも引剥ばかりしてられないだろう。稼ぐアテはあるのかい？ これから妹も養うんだよ」

貧民街では、年齢に関係なく稼がなければならぬ。そうしないと生きていけないのだ。

稼ぐ術のない者は、老若男女問わず死ぬしかない。

安定収入を求めるなら、どこかの商店に雇われるのが正攻法だが、五歳児を雇い入れるところな

どあるはずもない。

そうなると、どう転んでもその日暮らしになってしまう。

「どうやって稼ごうかな？ やっぱり冒険者になるのが手っ取り早いかな……」

そう呟いて、ナディは真剣に悩む。まあぶっちゃけてしまえば、冒険者自体がその日暮らしの集団ではあるが。

(……なんだ、結局変わらないじゃないか)

何やら思考が堂々巡りして、結局は本末が転倒してしまった。

「いやいや待て待て。ナディちゃんは冒険者にならないぞ」

思考のドツボにはまっているナディに、オットが待ったをかけた。

当のナディはなぜ止められたのが理解できず、不思議そうな表情を浮かべる。

「ナディちゃん、今いくつだ？」

「え？ んーと、五歳かな」

「だよな。普段の言動を知っていると、全然そう見えねーけど。実はヒト種じゃなくて、成人している別種族だって言われても納得できるぞ」

見た目が子どもにしか見えない種族も、この世界にはいるのだ。草原妖精や小妖精……コロボツクルといった種族がそれに当てはまる。

もっとも見た目が若くなったり、幼い子どもだったりするだけで、表情や行動は完全に大人だが。「そんなことはないと思うけど……でもほら。どっちにしろ自活しているし、できているから！」

「世の五歳児は普通それ、できねーからな？ 誰かに養ってもらうか、ヤベー組織の末端に利用されるか、売り飛ばされて奴隷になるかがせいぜいだぞ」

そこまで言われて、ナディはやつと自分が五歳児らしからぬことに気付く。

「えーと……やっぱり私って、変かな？」

恐る恐る聞いたところまで――

「ああ、変だ。普通に考えて変だ」

「変だねえ。常識的に考えて変だ」

意味も文字数すらもまったく同じ肯定を返されるだけだった。

「えー。そんなことないよー。そもそも『普通』とか『常識』っていうのは、種族とか住んでいる地域とか身分とか職業とか財産の差とかで変わってくるものだから、一概には言えないんだよ？」
諦めないナディはそんな正論を並べたものの、二人同時にため息を吐かれるだけだった。

「ああ。それを全部含めて、五歳児はそんなこと言わない」

「うん。言ってることは正しいが、五歳児はそう言えない」

「そもそも、大人だってこの結論はそうそう出ない」

「きょうび 今日日、大人だってそんな達者なことは言わない」

「マジかあ……」

大人二人に揃って断言され、ナディは肩を落とす。その仕草も、完全に五歳児のものではない。それにしても、オットとアガータの息がピッタリだ。アガータは否定していたが、実にお似合い



の二人である。言葉の文字数すら一緒だし。

ちよっと気落ちしていたナディだが、すぐに気を取り直して上を向き、右手を掲げて宣言する。

「でも諦めない！ 冒険者に、私はなる!!」

「いや無理だって。諦めない心意気は立派だけど、無理もんは無理だからな」

「そんなことないよ！ 愛と勇気と根性と努力と友情があれば、きつと勝利できる！」

「だーからー。無理なんだって。無理なもんは無理。分かってくれよ、ナディちゃん」

「ううん、無理じゃない！ できるよ！ 絶対にできる！ できるって信じれば必ずできる！ この世に頑張つてできないことなんて、ないんだよ！ もっと熱くなれ!!」

記憶にある最初の人生、異世界転移する前、地球にいた頃に見た熱血元スポーツ選手のように熱く、暑苦しく熱弁するナディである。

だが、いくら熱弁したところで本当にそれは不可能なのだ。

冒険者になるための必須事項。

これは書面に明記されており、冒頭にはこう記載されている。

『――まず、十二歳以上であること』

オットとアガータにそう聞かされ、ナディはその場に崩れ落ちた。

二章 冒険者になろう

ナデイが冒険者の年齢制限に引っかかって崩れ落ちてから、七年の月日が流れた。

その頃になると、ナデイも年相応にしつかりと成長した。だが相も変わらず、ゴロツキやら悪徳奴隷商人やらアホなお貴族やらに誘拐されそうになっているのは変わらない。

彼女が幼児から少女と呼べる年頃に育ったことで、拍車がかかる有様であった。

ナデイは濡烏の髪と暗紫の瞳を持ち、容貌が整っている。おまけに栄養に気を付けた食生活を送っていたおかげか、貧民街育ちの十二歳にしては発育もいい。

傍から見ても容姿がよく、貧民を狙う悪党どもの恰好の的である。

そして、彼女の隣にいる妹のレオノール。

七歳になったレオノールは、白金髪と翠瞳をした非常に可愛い女の子に育っていた。

どこか儚げで底欲をそえられる面立ちをしており、ナデイ以上に変態どもをホイホイしてしまう超下級の美少女に成長したのだ。

斜向かいに住むオットは、そんな姉妹をずっと見守ってきた者たちの一人であるため、美しく成長した姿に感慨もひとしおだ。

見守っていただけで、特に世話はしていない。

現在進行形でいろいろと世話になっているのは、むしろオットのほうである。ホイホイされたゴロツキどもの御相伴だとか。

今では近隣に住む貧民をまとめ上げ、それ目的の互助団体を立ち上げて会長にまでなっていた。ともかくナデイは、ホイホイで収入を得て、それを消費しながら生活していたのである。

ぶっちゃけ労働とは呼べない退廃的な生活だが、そこはまだ子どもであるから目を瞑ってほしい。(一時はオットさんを代表にして、商売でも始めようかとも思ったんだけどね)

わりと妙案だと思ったのだが、アガータに全力で止められてしまった。

アガータが言うには、オットは悪い人物ではないが壊滅的に商才がないらしい。

「保証されるのは、失敗と負債だけだ」と滔々と説得されたため、実行する前に廃案になった。

ところで、ゴロツキどもから巻き上げた魔力——魔結晶は現在、ナデイの【収納】に大量に溜まっている。十センチメートル大のそれが、数えるのが面倒なくらいにコロコロあったりするのだ。ナデイはそうした純魔結晶を数ミリメートル大に加工して、それぞれ違う魔法を付与したうえでネックレスを作製し、レオノールにプレゼントしていた。

自衛魔法はもちろん、治癒、体調管理、強化、感知、耐性、清潔、補修など……おまけに使用者制限まで付けた一級品である。

世間の常識では軽く国宝級を超えているのだが……四回目の人生で当たり前のように作り、家族に渡していたものより性能面でかなり劣っていたため、「まあいつか」と深く考えないで与えていたのであった。確実にやらかしているのだが、やはり気付いていないナデイである。

ここ最近のナディは、貧民街のゴミ溜めに捨てられている書籍を厳選して拾い集めて修復し、現在の知識を集めていた。

『魔王ヴァレリアが入滅してから二百年』かあ。そんなに経っているのには驚いたわ。国とかも結構興亡していたし。……待つて。あのひと、不滅の存在じゃない。なのにどうして滅んだのよ）集めた知識にいろいろと衝撃を受けつつ、ナディは自身の経験と知識をもとに妹へ英才教育を施したのである。

そのせいでレオノールの能力は、世間一般の常識から逸脱してしまっていた。

使い終わった修復済み書籍や、ナディお手製の魔導書は、惜しみなくゴミ捨て場に捨てている。

【収納】に入れていても嵩張るだけだから。

彼女の【収納】にはなぜか三度目以降の人生で集めたアイテム——貴重な品から、いい感じのただの木の棒まで——が大量に入っている。混然としているそこをいまだに整理しきれいていないので、不要なものは容赦なく捨てたい。

それに自作の書籍の表紙の裏に、悪ノリで『千剣姫の魔導書』と小さく書いてしまっていた。四度目の人生で得た異名が黒歴史になる前に、早く手放したかったのだ。

かくして英才教育を受けたレオノール。彼女は当たり前のように魔法を使うことができた。

しかも無詠唱であるばかりではなく、発動挙動すらない思考発動型と呼ばれる魔法も行使できる。おまけに系統が異なる三十以上の魔法を同時発動までできた。

ちなみに、現代において魔法を行使できる者は、ヒト種はおろか他種族でもほぼ存在しない。

高位の魔族や龍人族、一風変わった魔法体系である小妖精全般ならできるかも、といったところだ。

そうした種族にとっても無詠唱は高等技術で、思考発動型ともなると、魔族の王族ですら難しいと言われていた。日常会話を思考伝達で行う小妖精……コロポックルのみ、当たり前前にも可能だが。思考発動型の魔法は、伝説の『不滅の魔王』と彼の妃、彼らの血を引く子どもたちの中でも一部のみの秘奥技術だと伝えられている。

まあ、ナディの前世——つまり四回目、目がその魔王妃当人なのだから、当然のように使えるけれど。なんなら教授もできるし。

（レオ以外には教えないわ、面倒臭いし。そもそもこれは秘奥技術ですらなくて、魔力を感知できるなら誰でも行使可能だもの。才能次第かつ、エグいくらいの努力は必要だけど、その気になればヒト種だってできるわよ）

やりたいヤツは存分にやればいい。習得の出来不出来は自己責任だ。

ナディはレオノールの今後の養育計画まで立てていた。

まず十歳までに魔法・武術の基礎を習得させ、それと並行して貴族としての礼儀作法を教える。

レオノールには、時と場所と場合に合わせて適切なマナーで振る舞えるようになってもらいたかった。

亡くなった母親の身なりから推察するに、レオノールはきつと、どこかの貴族の血を引いている。もしかしたらいつか捜し出されて、在るべき場所に帰ることになるかもしれない。

そうなったときのために、貴族社会でも通用する立ち居振る舞いを教えておく必要があった。また万が一、礼儀作法がなくなってあちらの社会で孤立しても、逆境に負けないタフネスと物理的・魔法的な強さを身につけさせたかったのだ。絶対に困らないから。

力こそパワー！それがナディのモットーである。

彼女はかなりの脳筋であった。
(なんとなくわかっていただけ、レオは魔法適性が異様に高いのよね。……武術はちよつとあれっ
ぽいけど)

砂が水を吸い込むがごとく、知識と技術を吸収していくレオノール。

教えるのが楽しくなったナディは、彼女に自分の知る魔法技術をこれでもかと注ぎ込んだ。

規格外の教育を受けたレオノールも、よその家庭の事情を知らないため、素直に享受した。

ただ斜向かいのオットと同居を始めたアガータ夫婦の子らの勉強の様子を見たとき、違和感を覚えたが……レオノールは「知識も技術もあつて損はない」という結論に至った。反抗は特にせず、むしろより深く学ぶようになっていく。

レオノールは年齢のわりに妙に聡い子どもだった。幼児のはずなのに。

そんな日々を送りつつ、恐らく十二歳になったナディ。

彼女はついに冒険者登録をすべく、街にある冒険者ギルドへ向かうことにした。……レオノールと一緒に。

いつもはオットたちの家でおとなしく留守番してもらっているのだが、珍しく「一緒に行きた

い」と言い出したのである。

ナディは「その程度の我儘なら、まあいっかあ」と、深く考えずに了承し、仲よく手を繋いで出かけていった。

ちなみにナディの格好は、しっかりした木綿のシャツとジャケット、ポケットがたくさん付いた便利なパンツ。レオノールは白を基調としたワンピースにズボンを合わせている。皮革製サコッシュはお揃いだ。

間違っても女の子らしいスカートを穿きはしない。これ以上、ホイホイ率を上げたくないから。面倒臭いし。

なお、肩掛けにしているサコッシュはダミーで、二人とも貴重品は【収納】にしまっている。

貧民街から歩き続け、ナディたちは街に入った。

やがて冒険者ギルドに到着した二人は、外の喫煙所で一服している連中が訝しそうに見てくるのを気にせず中に入る。

ギルド内は広く、ホールは吹き抜けになっていた。南側のクリスタルのガラス窓から、温かな陽光が差し込んでくる。

この世界における一般的な冒険者ギルド——酒場と一体になっているイメージから逸脱した内装だ。

窓沿いの日が差す場所は、半テラス席になっており、どうやら食事も提供しているらしい。